早稲田大学大学院文学研究科紀要 第68輯（2023年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.68 (Mar.2023)

山陰地方に存するドイツ関連史跡の総合的検討

小　原　　淳

Ⅰ．はじめに

筆者は、日本全国に残る日独交流関連の史跡・史実を地域別に提示し、日独関係史の再検討を行おうとしている(1)。本稿では鳥取県と島根県に存する６件の事例を取り上げる。紙幅の都合から史料、参考文献への言及は最小限にとどめる。また、日付は陽暦で表す。

Ⅱ．山陰地方に存する史跡・史実

（１）「国民外交」論からみたビスマルク(2)

1907～13年にウィーンで暮らした青年時代のヒトラー（Adolf Hitler 1889-1945）が、しばしばオーストリア帝国議会の議場を訪れ、論戦を傍聴したことはよく知られる。同時期の1910年６月８日、この議会の階上席に数名の日本人の姿があった。視察に訪れた貴族院議長、徳川家達（1863-1940）らの一行である。

この時の模様は、現地の日本大使館の一等書記官として徳川に随行した信夫淳平（1871-1962）が帰国後の著書『東欧の夢』のなかで振り返っている。それによれば、総数516の議席の半分は空席、37の政党に分裂した議員たちは雑談や他事に夢中で、離席する者も多かった。議長はこれを制止もせず、副議長と私語を続けている。演説は聞こえにくく、まれに聞こえてきても様々な言語が用いられており、理解できない。信夫は「元来塊国の下院は、議員の暴言悪罵を以て名ある議会の一」であるとし、ある書記官が数年間の議事録から拾い上げた罵詈雑言の数が1763に達したというエピソードを紹介して、「同国下院は我国の選良の議場に於ける非紳士的言動に比し甚しき遜色あるを見ない訳である。獣名交りの弥次り方はどんな風にやるか一度聴いてみたいと思ふ。他日選良となつた折に大に参考となるに違ひない」と揶揄している。

外交官、外交史家の信夫淳平は鳥取池田藩の藩医の家系の出身で、父の恕軒（1835-1910）は漢学者として東大などで教えた。鳥取時代の信夫については史資料に乏しく多くを知り得ないが、鳥取県中学校（現在の県立鳥取西高校）を卒業後、開成中学校（現在の開成高校）、高等商業学校（現在の一橋大学）などに学んだ。1897年に外務省に入省し、領事館補としてソウルに赴任したのを皮切りに、メキシコ、関東総督府、仁川、オーストリア、オランダ、インドに勤務する。

1917年、早稲田大学の教員に転じて外交史と国際法を講じ、新聞『新愛知』（現在の『中日新聞』）の主筆参事も務めた。戦時中に早稲田を定年で退くも、80歳となる1951年に復職、1956年まで教壇に立った。家庭生活においては、早逝した最初の妻との間に四男一女を授かったが、長女は夭折し、厳格な父に反発した息子たちは次々と家出して、次男と四男が自殺した。長男の韓一郎（1900-76）は戦後に朝日新聞社代表取締役、三男の清三郎（1909-92）は名古屋大学法学部教授になっている。

外交史家、国際政治学者としての信夫の代表作が、1925年７月から翌年３月にかけて発表した「国際政治論叢」である。『国際政治の進化及現勢』、『国際政治の綱紀及連鎖』、『国際紛争と国際連盟』、『外政監督と外交機関』の四巻から成るこの著作は、「日本における国際政治学の草分け的業績とみなし得るもの」（酒井哲哉）と評価されており、1943年に学士院恩賜賞を受賞した。

同書において信夫は、第一次世界大戦後に確立されつつあったアメリカ合衆国の覇権に批判の目を向け、アメリカの謳う人道主義的理念は欺瞞であると説く。また、戦後に創設された国際連盟の限界も指摘し、大戦前の勢力均衡原理の有効性をあらためて擁護する。しかし、ただ旧説を墨守し、昔日を懐古しようとするわけではない。信夫は、国際協調や人道主義を掲げる大戦後の「新外交」、そして世界規模で進展する民主主義の潮流に対応するための理論として、独自の「国民外交」論を提唱している。

信夫によれば、「官僚外交」や「軍閥外交」に対置される国民外交には、フランス語のDiplomatie nationaleと英語のPeople's diplomacyに即した二つの次元がある。第一は、「国民の時代思潮を酌み、国民の対外的自覚を代表して政府の行ふ所の外交即ちDiplomatie nationale」であり、「国民が己れの世界に於ける位地を自覚し、合理的抱負を発憤し、政府は国民の自覚抱負を代表し、識者階級の後援の下に之を運用する所の実力ある外交」である。信夫はこの意味での国民外交の典型として、「臥薪嘗胆」の言葉で表現される三国干渉後の日本の「対外的時代思潮」に「有力な後援」を得た、小村寿太郎（1855-1911）の外交を挙げている。国民外交の第二の次元は、「国民が政府の形式外交と離れ、対手国の国民との間に互に誠意を披瀝して意見を交換し、意志の疏通を計り、将た特定の行為に由りて友情を表彰し、依つて以て国交の親善に寄与するといふ謂ゆるPeople's diplomacy」である。信夫はその最たる例として関東大震災に際しての世界各国、とくにアメリカからの人道支援を挙げ、それに対して知識人までもが中国人や欧米人を蔑称で呼び、敵視する日本の現状を問題視している。

しかし、大戦後の国際情勢の変化を意識しつつも、根本的には大戦前の外交観の延長線上で展開される信夫の議論は、日本の対外進出の加速、国際関係の悪化、そして蠟山政道（1895-1980）や神川彦松（1889-1988）などの後進の台頭を前にして、斬新とは言い難かった。旧世代の学者となりつつあった信夫は第一次上海事変の最中の1932年３月、『ビスマルク伝』（改造社）を書いた。表１に示すように、明治から戦前昭和にかけての日本では、ビスマルク（Otto v. Bismarck-

Schönhausen 1815-98）の伝記や演説集、言行録、書簡集の類は30点ほどにのぼるが、歴史家が書いたもの、ビスマルクの全生涯をカバーしているもの、内政と外交の両面を扱ったものは少ない。信夫の著作は一般読者向けということもあって新味はないが、一面的なビスマルク賛美に傾くことなく彼の長所と短所の双方に目配りし、幼年期から晩年までをバランスよく叙述している。

なお、同書は後に『鉄血宰相ビスマーク』に改題して再び出版されており、発行日は1942年３月５日だが、序言に付された日付は太平洋戦争が始まる「昭和16年12月」になっている。この改版は序言で、ヒトラーを「ヰーン会議以降の四分五裂の独逸連邦内にありて頭が抬らず、加ふるに内政混沌として帰一する所なかりし普魯西に天の降したるビスマルクに彷彿たる所がある」と、あるいは「一たび決心したることは万難を排して貫徹する」ビスマルクと、「適材を適所に置く」ヴィルヘルム一世（Wilhelm I. 1797-1888）の長所を併せもった人物と評している点が目に留まるが、しかし多少の加筆や削減、章立ての変更――晩年を扱った章に「彼は遼東還附の三国干渉に反対す」の節が追加され、また最終章の最後に、第一版の「前がき」をベースとした「括言」を加えられている――があるものの、旧版と大意に相違はない。

『ビスマルク伝』において、信夫は以下のように書いている。「正義人道なり国際協調なりが外交の基調と謳はるゝに至つた今日、今さらビスマルクの伝でもあるまい、と人或は貶すかも知れない。何故に爾く貶すかと試に反問すれば、ビスマルクは権謀術数をこれ事とせる旧式外交の代表であるが故と多分答ふるであらう。けれども、そは鉄血宰相の僅に半面を視たに過ぎざる偏怙皮相の観である」。ビスマルクは本来は「平和を好み自由を愛したる文治的政治家」であり、「祖国を統一し且恒久の平和を欧州の中原に樹立せしめんがため、その階梯的一手段として一時荒療治をやつた迄である」というのが信夫の見方であり、改版でもほぼ同じ文章が結論部で繰り返されている。この一文は、「旧外交」の立役者への擁護であると同時に、「旧外交」の意義を捉え直そうとする立場の表明になっていよう。

一般向けの読み物である同書のなかに、信夫は自身の「国民外交」のテーゼをさりげなく織り込んでいる。それは1878年のベルリン会議を扱った箇所――信夫は本文300頁のうちの21頁を割いており、これは同様にスタンダードな人物伝の体裁を採った吉川潤二郎（生没年不詳）の273頁中13頁、鶴見祐輔（1885-1973）の496頁中18頁よりも多い――である。ここで信夫は、ベルリン会議の特徴は「往昔の重なる国際会議を支配したる宮廷外交の余喘が本会議に於ては既に殆んどその跡を絶ち、各国全権は各自の力量に依りて事を決せし以外に、元首その人の背景は極めて薄かつたこと」にあるとしたうえで、「曩（さき）の欧州大戦は更に官僚外交の終尾期と見るべく、爾来世界は次第に国民外交の世に入り来らんとしつゝある」という観察を示している。

マキャヴェリズムと軍国主義に染まった遺物として片づけられつつあった「旧外交」を再考し、そこに新たな時代の外交へのメタモルフォーゼを見出そうとする信夫のビスマルク伝は、国策と歩を揃えるように東亜共同体論を唱え始めた「新外交」論への牽制の一石となるには、弱かった。

しかし外交の担い手や手法の移り変わりに着目し、19世紀後半のヨーロッパ国際関係のなかに潜む変化を剔抉する信夫の洞察には、この時期を「ビスマルク外交の時代」という表現で一まとまりに把握しがちな今なお、取り上げて論じ直すべきものが含まれている。

（2）『ゲーテとの対話』との対話[3]

境港で育った漫画家の水木しげる（武良茂、1922-2015）は93歳になって、「水木サンの80％はゲーテ的な生き方です」と語っている。小学３年生の時に自分の手相を見て生命線の短さに気づいた彼は、死への恐怖から読書に耽るようになった。「最も愛読したのはゲーテで、特にエッカーマンの『ゲーテとの対話』にシビれた。……何度も読み返すうち、生きていること自体の燦然（さんぜん）とした輝きがせつないほど胸に迫って、戦争に行くのがますます嫌になった」。1942年、鳥取歩兵第四十連隊留守隊に入隊した水木は、デッサン用の紙と鉛筆とともに三巻本の『対話』を雑嚢に忍ばせたという。

水木が戦地に持参した『対話』の訳者は、同じく鳥取県出身の亀尾英四郎（1895-1945）である。独文学者の亀尾は、米子の糀町二丁目五九番地の足袋製造業者の家に生まれた。水木の母方の曾祖父である住田善平（1855-1906）は地元の名士で、亀尾の幼少期に米子町長や町会議員をしており、善平の営む住田呉服店と亀尾家の店は数百メートルほどの距離だった。

米子中学校を出て岡山の第六高等学校に進んだ亀尾は、小宮豊隆（1884-1966）から『対話』の訳出を勧められ、小宮や立澤剛（1888-1946）、上田整次（1873-1924）、青木昌吉（1872-1939）の指導を受けて訳業に取り組んだ。1917年に東京帝大文学部独文科に入学、在学中に坪田譲治（1890-1982）、相良守峯（1895-1989）、遠藤宏（1894-1963）、木暮亮（菅藤高徳、1896-1981）らと同人誌『地上の子』を創刊し、それらの誌上に発表した訳文をまとめて、1922～27年に春陽堂から出版した。亀尾自身の言葉では、「この書は私にとつて精神上のたえざる養ひであり、又たえざる鏡であつた」。亀尾訳の『対話』は1940～41年に岩波文庫として再び出版されており、水木が読んだのはこの版と思われる。

1921年に大学を卒業した亀尾は、独文科の副手を経て、1925年に東京高校の教授に着任した。この前後にグリルパルツァー（Franz Grillparzer 1791-1872）やストリンドベリ（Johan A. Strindberg 1849-1912）などの翻訳も手がけた。1928年、妻子を米子の実家に残して欧米各国に留学、帰国からしばらくして1943年に『ゲエテと独逸精神』を発表、翌年にはボイムレル『ニーチェ』を翻訳した。しかし、日立亀有工場の動員の監督にあたっていた1945年５月、国電亀有駅の階段を登り切れず、途中の踊り場で呆然とたたずむ。８月に病床に就き、10月11日午後７時、栄養失調が原因で死亡した。

同月28日の『毎日新聞』朝刊の一面には、「〈闇を食はない〉犠牲、亀尾東京高校教授の死」と題した記事が掲載されている。「……大東亜戦争が勃発して食糧が統制され、配給されるやうに

なつた時政府は『政府を信頼して買出しをするな。闇をするものは国賊だ』と国民に呼びかけた。同教授は政府のこの態度を尤もだと支持し、いやしくも教育家たるものは表裏があつてはならない。どんなに苦しくとも国策をしつかり守つていくといふ固い信念の下に生活を続けてゐた。家庭には操夫人との間に東京高校文乙二年の長男利夫君以下、四歳の覚君まで六人の子を配給物で養つてゐた。だが、庭に作った二坪の農園では如何ともすることが出来なかつた。……遂に八月末、同教授は病床にたふれた。……残された日記の終りのページに『国家のやり方がわからなくなつて来た。きめられた収入とこの食配給では今日生活はやつて行けさうもない』という意味が記されてあつた。『国家を信じてゐた父も死の間際には自己の信念がグラついて来たことに煩悶してゐたやうです』と長男利夫君は語つてゐる。正しき配給生活者の死を政府は何と見るか？そして今また操夫人も衰弱して病床にある……」。

亀尾の死――妻もその三か月後に衰弱死した――は大きな波紋を呼んだ。直後の時期に限っても、石川達三（1905-85）が『朝日新聞』（1945年11月９日付）、山川均（1880-1958）が『文藝春秋』（1945年12月号）、中野重治（1902-79）が『展望』（創刊号、1946年１月）、大内兵衛（1888-1980）が『世界』（創刊号、1946年１月）に、それぞれ文章を寄せており、飢餓に直面していた社会、とくに知識人が受けた衝撃の強さが窺える。

水木に話を戻す。激戦地のラバウルで左腕を失いながらも生き延びた水木は、1946年３月に帰国した。暮らしに追われ、美術学校での勉強も長続きせず、生活のために様々な仕事に就いた彼は、闇屋稼業にも手を染めたが、秋田に出向いた際に仕入れの金を落としてしまい、この商売もうまくいかなかった。しかしそうした折、礼拝の後に出るふかし芋につられて訪ねた教会の女性宣教師に諭されて、デッサン教室に通い始め、絵心が蘇ってきた。数年後、水木は紙芝居作家、次いで「餓死か成功かのふたつにひとつしかな」い貸本漫画家――実際に、知り合いのなかには餓死した者もいたという――で生計を立て始め、40代の半ばで人気を確立した。なお、この頃に描かれた代表作『悪魔くん』（1963-64）は、ゲーテ（Johann Wolfgang v. Goethe 1749-1832）の『ファウスト』を下敷きにしている。

空腹の時代をしたたかに生き延び、「ベビィの頃から胃がいいものだから、なんでも美味しく食べられる」自らの健康をゲーテの健全さ、逞しさと重ね合わせ、また餓死の不安を感じたことのない者は「あまり努力しないし、自分を解放する技術というものがない」とさえ語る水木と、飢餓に抗することなく死を受け入れた亀尾とは、一見して対極的である。しかし亀尾の教え子で、「進歩的文化人」として名を馳せた社会学者、日高六郎（1917-2018）が1946年１月に書いた「亀尾先生のこと」と題する文章を読むと、その印象は変わる。日高は、死の直後に亀尾が「愚者の典型」（石川）、「同情せられるべき存在」（中野）などと評価されたことへの違和感、「先生の死が、日本の食糧事情の窮迫を示す一つのバロメーターとして、いわばセンセーショナルに取り上げられた」ことへの不満を露わにする。日高によれば、亀尾の死は新聞が報じたような、「生徒の師

表としてあるべきものの道徳的反省という如きものでは無かった筈」で、「先生をそのような道学者扱いにすることは、我々にとっては耐え難い誤謬」だった。むしろ日高が強調するのは、「先生の気質的な恐るべき意志の強さ、冷酷と感じられる程の自己制御の力」である。彼の記憶のなかの亀尾は「冷然と、お子さん方が空腹を訴えられるのを放置しておられた」。「そして先生は二階の部屋で、今後の仕事について壮大なプランを立てておられた」。結局、日高は亀尾の死の理由を特定してはいない。しかし、亀尾が頑強な「自己制御の力」の持ち主であり、その頑強さは自らや家族の命を危険に晒してなお揺るがないほどのものだったこと、そして亀尾の死は社会道徳や時代状況とは無関係な、ごく個人的な動機によるものだったと語っているのである。

この見方は日高独りのものではない。同じく亀尾の教え子だった音楽評論家の田代秀穂（1917-?）も、亀尾は「非情な、超人的な、時には冷酷とさえ感じられた鋼鉄の意志」の持ち主であったと追想している。田代は、「四つになるお嬢さんが遊びに出たまま行方不明となって、二、三人日家に帰らなかったことがあった」が、亀尾が心配する家族を制して、「『あの子は大丈夫だ、きっと帰って来る。警察などへ届けなくとも良い』と言われたまま頑として動じられなかった」というエピソードを紹介したうえで、亀尾が闇買いをしなかったのは「痩我慢、為政者への信頼、俗な道徳感などによるものでは決してなかった。もっと暗い、烈しい、やみ難い気持ちであったのだ」と推測している。日高や田代が回想する亀尾は、時流にも道徳にも迎合しない強靭な自己の持ち主であり、彼と同様に『対話』を愛読した水木と、ある面で似通っている。

最後にドイツの場合にふれておく。終戦後はドイツでも物々交換や闇取引が横行し、ヨーロッパが記録的寒波に見舞われた1946〜47年の冬には、国内で数十万人が死亡したと言われる。その最中の1946年の大晦日、ケルン大司教・枢機卿フリングス（Josef Frings 1887-1978）は聖エンゲルベルト教会で説教を行い、石炭の供給不足に言及して、自らの生命を守るために必要なものを仕事や祈りによって確保できない場合、別の方法で手に入れることは容認されうると説いた。フリングスはさらに、そうした行為が蔓延していることを嘆き、不法に入手した物品を返還しなければ神の許しを得られないと付け加えたが、この時の彼の発言から、生存に必要なだけの少量の物資をやむを得ず盗んだり、不当な方法で獲得する行為は fringsen と呼ばれるようになった。

2005年にフリングスの出身地である都市ノイスと、ライン川を挟んで対岸にあるデュッセルドルフとを結ぶ橋が「ヨーゼフ・フリングス枢機卿橋」と改名された際には、困窮者に石炭を提供する慈善事業が実施されている。こうした飢餓への反応、記憶の継承の仕方に、彼我の大きな違いを見いだせる。

（3）「日本人のルーツ」を探したドイツ人[4]

明治初年の山陰を訪ねた数少ない欧米人の一人に、ケンパーマン（Peter Fr. Kempermann 1845-1900）というドイツ人がいる。長沢敬の研究によって輪郭が明らかとなったこの人物は今

なお決して著名ではないが、当時の欧米人の日本理解、日本人観を考えるうえで興味深い存在である。

ケンパーマンは1845年３月１日、宗派対立と反プロイセン主義が根深いライン地方の都市クレーフェルトに生まれた。ミュンスターのギムナジウムを1865年に卒業し、ベルリンで学び始めたが、翌年12月にプロイセン外務省に通訳見習いとして採用された。1867年８月に来日、駐日プロイセン・北ドイツ連邦代理公使ブラント（Max v. Brandt 1835-1920）の下で最初は横浜、1869年１月からは東京で勤務した。1872年、弟も貿易・保険会社グッチョウ商会の派遣で来日し、横浜勤務を経て、1875年に神戸支社長に就任している。

外交官としての仕事のかたわら、ケンパーマンは神道や国学、古代日本について深く学ぼうとした。平田篤胤（1776-1843）の『古道大意』に感銘した彼は1869年末、平田家が主宰する国学塾、気吹舎に入門を請うて断られている。しかし、これでケンパーマンの学究熱が冷めたわけではなく、1873年３月にドイツ東洋文化研究協会（OAG）の設立に関わって書記となり、数年ごとに会報に論文を投稿した。なお、離日する前年の1878年には、同会の第五代会長となっている。

1877年10月、ケンパーマンは、前年８月に鳥取県が島根県に合併されて出雲、石見、隠岐、伯耆、因幡の五州が一県となった山陰に旅立った。神在月の出雲を周り、日本の起源を調べることが主目的だったと思われる。神戸を出発した彼は播磨、美作を抜け、四十曲峠を越えて米子に向かい、中海を船で進み、松江に到着した。ここに８日ほど滞在し、出雲大社や佐多神社、布志名、玉造を周った後、船で大根島を経て米子から帰路に就く。10月22日に大山に登り、山陰道をさらに東に進んで因幡、但馬を通過し、和田山宿から播但道を南下して姫路へ戻った。さらに大阪、京都、奈良に足を延ばし、三輪や法隆寺、龍田を見物して、河内国分で旅を終えた。おそらく、二ヶ月の旅程であった。翌年４月、ケンパーマンは旅の一部始終をOAGの会報に発表した。山陰を巡った西洋人の記録として、最初期のものである。

ケンパーマンは記紀の記述を根拠に、太古の日本列島には大陸から二度にわたる人間集団の渡来があったと推測する。ケンパーマンの考えでは、第一集団が住み着いたのが出雲や石見だったが、彼らは後から九州に渡ってきた第二集団によって滅ぼされた。そして第二集団はさらに北上してアイヌ人を追いやり、日本を建国した。しかし、第一集団の末裔はわずかに生き延びており、「古き日本人」、「オリジナルの日本人」を探る手がかりは出雲に残されている。出雲を訪れたケンパーマンは社寺を周り、地域に固有の古い言葉を拾い集め、漢字伝来以前の日本で使用されたという「神代文字」に関心を抱き、肌が白く瞳や髪が黒い住人たちの容貌に古来の日本人の姿を見い出している。

ケンパーマンの日本人論は素朴で、科学的な根拠にも乏しい。しかし、彼の考究を奇矯な門外漢の珍説と片づけて、冷笑して済ますのは後世の傲慢である。日本人のルーツへの強い関心はケンパーマンのみならず、一流の学者も含めて来日外国人の多くが共有しており、諸説紛々として

いた。言語学や考古学、歴史学、人類学などの知識を駆使した彼らの議論は、当時としては先端的なものであり、またこんにちからすれば、19世紀ヨーロッパ人の日本理解、世界理解を知るうえで無視できない。

日本人の起源論に関しては、早くはフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト（Philipp Franz B. v. Siebold 1796-1866）が愛石家・本草学者の木内石亭（1725-1808）の説を参考に、日本各地に残る石器はアイヌ人の遺物であるとする考えを示しているが、ケンパーマンが山陰を旅する直前にこの分野で大発見があった。1877年 9 月16日、東京大学教授のアメリカ人生物学者モース（Edward S. Morse 1838-1925）が大森貝塚を発掘したのである。モースは翌年 6 月の講演で、出土した人骨に傷があることを根拠に、かつての列島には日本人ともアイヌ人とも異なる食人人種が住んでいたと主張した。大森貝塚は日本考古学発祥の地とされ、モースの功績は後年まで称えられている。

しかし、大森を掘った西洋人はもう一人いる。シーボルトの次男で、オーストリア=ハンガリー帝国公使館員として来日したハインリヒ（Heinrich v. Siebold 1852-1908）である。考古学に関心があったハインリヒはナウマン（Edmund Naumann 1854-1927）の助言を受け、モースと同じ1877年秋に大森貝塚を発掘した。モースが東京府に要請して発掘の権限を独占していたため、大蔵省に出向していたハインリヒは、貝塚のある工部省所有の鉄道線路敷地への立ち入り許可を得て、発掘を行ったのだった。父の推論を受け継いだハインリヒは、貝塚はアイヌ人のものであり、彼らは朝鮮半島から渡来した「原日本人」に駆逐されたという説を唱え、モースと対立した。翌年、モースとハインリヒは北海道で調査を行い、それぞれに自説の強化に努めた。1879年にはハインリヒは英文の著作を横浜で自費出版し、さらに日本語で概説書『考古説話』も出版したが、後世の評価を勝ち取ったのがモースであることは周知のとおりである。

ケンパーマンの説は、こうした論争と関係づけて意義を検討する余地がある。なお、彼の論考は一定の反響を呼んでおり、日本研究の先駆者チェンバレン（Basil Hall Chamberlain 1850-1935）が『古事記』の訳書の序文で、自身に先んじて古事記研究を行った一人としてケンパーマンにふれているし、また経済学者の福田徳三（1874-1930）は博士論文においてケンパーマンの論文を参考文献に挙げている。

さらに、ケンパーマンが訪れた1877年前後の出雲が、誕生間もない明治国家におけるホットスポットの一つだったことにも注意を促しておきたい。ケンパーマンの祖国ドイツが文化闘争のさなかにあったこの時期、日本も近代国家建設に伴う宗教の再編成の只中にあった。王政復古と祭政一致を標榜する明治政府は国家神道の整備を進めたが、仏教勢力からの反発に加え、神道内部で各派の対立が続いていた。

そうしたなかで脚光を浴びる存在となったのが、出雲大社の宮司を務める出雲国造家の千家尊福（1845-1918）である。1872年に第八十代国造となり、翌年に教派神道である出雲大社敬神講（現

在の出雲大社教）を創始した尊福は、平田篤胤の思想も受け継ぎ、出雲大社は幽冥界の首府、「諸神社の総宰」であると主張した。彼は出雲のみならず中国・四国地方を巡教し、各地で生き神のごとく迎えられた。原武史によれば、熱狂的な信者たちが尊福の座った薦や入浴後の風呂の湯を争って持ち帰る様子は、天皇の巡幸の際に見られた光景さながらであり、しかも尊福が巡教した地域は、天皇が巡幸しなかった地域に当たっていた。西南戦争――終結したのは、ケンパーマンの山陰旅行の直前の９月24日である――、自由民権運動、地租改正反対一揆などが各地で連発した時期にあって、出雲を発信源とする宗教熱の高まりは、新政府にとって看過しえない動きだったであろう。

国造に興味をもったケンパーマンは、火継神事の際に国造が用いる火鑽杵や火鑽臼について出雲大社の神官たちに質問を繰り返したり、松林寺に赴き、代々国造を務めた千家氏と北島氏の墓に詣でたりしており、おそらくは意図せずして、不穏の渦中を訪ね歩いていたことになる。

山陰旅行から一年半後にケンパーマンは離日し、1879年からイギリス領香港で副領事、1881～86年にマニラで領事、1886～87年にソウルで総領事、1888～97年にバンコクで弁理公使および総領事、そして1897年からシドニーで枢密顧問官公使および総領事を務めた。1888年２月11日、ハンブルク市参事会員の実業家ケーラー（Alexander Kähler 1832-1907）の娘と結婚し、五人の子供をもうけたが、妻が他界した翌年の1900年、55歳で赴任先で病死した。生前に彼が集めた『古事記』や『古史成文』、『古事記伝』、『日本書紀』、『続日本紀』などのコレクションは、1905年にハンブルク美術工芸博物館に寄贈された。ハンブルクは日本研究のセンターの一つとなるが、そこには確かにケンパーマンの貢献を確認できる。

（４） 知られぬドイツ人の面影[5]

松江で教えた外国人として有名なのは小泉八雲（Lafcadio Hearn 1850-1904）だが、彼よりもずっと長くこの町に留まり、沢山の教え子を育てたドイツ人がいる。大正末期から14年にわたって松江高校の教壇に立ったカルシュ（Fritz Karsch 1893-1971）である。若松秀俊の綿密な調査によって詳細が知られることになったこの人物は、地方社会における日独交流の豊かさを示す好例である。

ドレスデンの隣町ブラゼヴィッツに生まれたカルシュは、ドレスデン工科大学などに学び、第一次世界大戦での従軍生活から帰還した後、1919年にマールブルク大学に入学、新カント学派の哲学者ハルトマン（Eduard v. Hartmann 1842-1906）に師事した。ハルトマンの哲学に加えて人智学者のシュタイナー（Rudolf Steiner 1861-1925）の思想に傾倒し、後に次女はシュタイナー教育を実践する自由ヴァルドルフ学校の教員となり、長女は人智学関連のテキストの英訳を行っている。1921年に結婚した妻エンメラ（Emmela Karsch-Axenfeld 1896-1971）の祖父は、オスマン帝国で活動した改宗ユダヤ人の牧師で、伯父に著名な眼科医のテオドール（Theodor Axenfeld

1867-1930)、従妹に音楽家のエディット（Edith Picht-Axenfeld 1914–2001）がいる。

1923年に哲学の博士号を取得したカルシュは２年後に来日、八雲の著作をつうじて魅かれた松江に赴任し、1939年までドイツ語を教えた。熱意のある温和な教師で、ローレライの歌や飛行船ツェッペリン号の話なども交えて、丁寧な授業をしたという。教え子は2000人を数え、政界、官界、法曹界、学界など各分野で活躍する人材が輩出した。教育のかたわら、ハルトマン哲学などに関して幾つかの著作を書き、松江や日本各地を描いた多数の絵画や写真も残した。八雲の家から徒歩で10分ほど離れたところには、カルシュ一家が住んだ洋風の官舎が今も残っている。

来日ドイツ人たちの評判も好意的である。1937～47年に広島高校（現在の広島大学）でドイツ語を教え、戦後にハイデルベルク大学教授となった美術史家ゼッケル（Dietrich Seckel 1910-2007）は松江で度々カルシュ夫妻の歓待を受け、一緒に各地を旅行もした仲だが、ベルリンの母へ送った手紙のなかで、カルシュは広い視野をもち、協調性と批判精神を兼ね備えた常識人であり、夫婦ともに教養豊かだと書いている。年下のゼッケルは、カルシュを「生活態度はかなりプチブル的だが、本当に親切で、人間的に成熟した賢明な人」と評している。

1939年、松江高校での任期を終えたカルシュは短期間ドイツに戻ったが、1940年に再来日して大使館付武官として東京で勤務、1947年に帰国した。晩年の1968年、松江高校の同窓会の招待を受けて再来日し、2000年には「カルシュ博士顕彰会」が発足している。

松江に大きな足跡を残し、草の根レベルでの日独交流の深化に貢献したカルシュだが、十分に検討されていないこともある。それは、ナチズムとの距離の問題である。ナチの政権掌握の翌年にあたる1934年、カルシュは東京の日独文化協会によって出版された論文集『国民運動を理解するための諸論考』に、「ドイツの国民運動の倫理的基礎」を寄稿した。共著者の文学者・日本学者ドーナート（Walter Donat 1898-1970）はゼッケルの前任者として1925～35年に広島高校講師を務めた後、1938～41年に東京日独文化協会ドイツ人主事、1939～41年に日独文化連絡協議会ドイツ人主事を歴任し、ナチ党の「日本支部文化代表」の肩書を帯びた人物である。同論文でカルシュは、ナチズムは「理念に支えられた純粋にドイツ的な運動」であり、その思想は、指導者原理や忠誠心、集団意識、「自らのフォルクのために犠牲を厭わず、フォルクのために奉仕する」精神を内実とした、「フォルクとその力と可能性に対する、宗教的な深みをもった信念」であると説明した。そして彼は自由主義や民主主義、議会主義を非ドイツ的思想と見なすとともに、現代社会が生み出した知性の偏重や過度な効率の追求、野放図な個人主義とその裏返しで進行する画一的な集団主義に異議を唱えた。

さらに翌年の春、ナチ党に属する教員団体である国民社会主義教員連盟――1930年代前半、日本には約40名のドイツ人教師がいたが、その四分の三程度が同連盟に加入していた――の前会長で山口高校（現在の山口大学）の教員クラッセン（Wilhel Classen 生没年不詳）、西日本支部代表であったエッカルト（Hans Eckardt 生没年不詳）、同副会長のドーナート、カルシュの４名は

「日本の文化政治状況―国民社会主義教員連盟ライヒ指導部への報告」と題した覚書を作成し、関係各所に送付した。日本研究者のビーバーによれば、ここでカルシュは、在日ドイツ人教員がドイツの対日文化政策を遂行するうえで重要な役割を果たし得ることを強調し、「フェルキッシュな生活の核としての」家庭生活の尊重や、「騎士道精神、名誉、勇気」といった日独に共通する価値観を強調することで、学生たちにナチ・ドイツへの「共感」を浸透させられると説き、学校図書館から「非ドイツ的、平和主義的で軟弱、退廃的な書物」を一掃すべきだと提言した。

しかしこうした発言を捉えて、カルシュをナチズムの信奉者と即断することはできない。その最大の理由は、妻エンメラのユダヤ系の出自にある。従妹のエディットが音楽活動を制限されたように、カルシュ一家も迫害を受ける可能性があったことを思えば、彼がナチズムに心酔していたと解釈するのは無理がある。また、1935年にシュタイナーの理念を継ぐ人智学協会が禁止され、翌年からシュタイナー教育を実践する学校が閉校に追いやられたことも、カルシュをナチズムから遠ざけた可能性が高い。

1934年の著作について言えば、この論文集は日独文化協会が刊行する「日独精神交流叢書」の第五作目であるが、カルシュは既に1928年に既に、同叢書の第一作目として論文「カントとハルトマンにおける自由の問題」を発表しており、その時もドーナートの論文との合冊という形式をとっている。つまり、カルシュとドーナートの知的協力はナチが政権を獲得する1933年よりも前から始まっているし、1934年の共作も「ナチ以前」からの共同執筆活動の延長線上にあり、カルシュは1933年以降になって突如として、ナチに心酔するドーナートに接近したわけではない。

こうした見方は、ドーナートの後任にしてカルシュの友人であったゼッケルの証言によって補強される。ゼッケルによれば、ドーナートがナチズムへの傾倒を深め、ドイツ人教師たちに体制への協力を強く求めるようになっていったのに対して、カルシュはナチズムへの違和感を公言することはなかったが、ドーナートと「彼の犠牲者〔ドーナートの同僚たち：引用者〕をあまりにも愚かな行為から守ること」を自らの役割だと考え、ドーナートにブレーキをかける役割を務めていた。「ザクセン人らしい柔和な性格で、曲がったことをしない」カルシュは、ドーナートの尊大な態度や攻撃的なもの言いを嫌悪していたという。

カルシュは自身の生涯や思索をまとめて公表することがなかったが、死後に１万5000頁に及ぶメモを残しており、アメリカ在住の長女が保管している。その解読が進めば、カルシュの全体像がさらに見えてくる可能性がある。

（５）「和鋼」の再発見(6)

明治日本にとって鉄鋼業の近代化は富国強兵の根幹を成す大事業だったが、その際のモデルの一つはドイツのクルップ社であった。既に幕末の1862年には、ロンドン万博を視察した福沢諭吉（1835-1901）が同社の製造した巨大船軸や8000キログラムの鋳塊を目にし、『西洋事情』のなか

で紹介している。また、幕府の開陽丸発注に伴ってオランダに派遣された榎本武揚（1836-1908）や赤松則良（1841-1920）は、1864年２月～３月にデンマーク戦争を観戦してクルップ製の兵器の威力を知り、同社を視察、当主のアルフレート（Alfred Krupp 1812-87）に面会している。幕府の当初の予定では、開陽丸に搭載される大砲26門のうち６門がクルップ製の施条砲になる予定だったが、榎本らの提言でクルップ砲は18門に増やされた。さらに1873年３月８日には岩倉使節団が同社を訪れ、１万2000人が働く「世界無双の大作場」を見学している。

こうした原体験は、専門家の招聘や留学生の派遣をつうじて日本鉄鋼業の発展へと繋がっていくが、しかしその過程は技術・知識の一方的な輸入だけだったわけではない。例えば、海軍砲術学校の第一期生であった薩摩出身の大河平才蔵（?-1894）は、1878年３月にクルップに派遣され、1881年７月まで坩堝製鋼工場や大砲工場で一般作業員に混ざって研修を受けたが、帰国後に石見地方を視察し、日本の伝統的な製法に基づいて造られた鋼が坩堝製鋼の原料に適していることを確認した。大河平はさらに研究、開発を続けたが、肺炎のために30代半ばで早逝した。

しかし、西洋式の近代製鉄法に日本の古来の技術を組合わせようとする取り組みはその後も続いた。その代表的な担い手が俵国一（1872-1958）である。俵は浜田の旧家の六男として生まれた。三歳年上の兄、孫一（1869-1944）は官僚・政治家となり、商工大臣や立憲民政党幹事長などを歴任しており、その孫には政治評論家の孝太郎（1930-）がいる。島根二中（現在の県立浜田高校）、松江中学（現在の県立松江北高校・松江南高校）に学んだ俵は1888年に上京、共立学校（現在の開成中学・高校）、一高を経て帝国大学工科大学に進学、ここで野呂景義（1854-1923）、渡辺渡（1857-1919）、今泉嘉一郎（1867-1941）に師事した。1897年に卒業して同大助教授に着任、1899年７月からフライベルク鉱山大学に留学し、野呂や渡辺、今泉を指導したレーデブール（Adolf Ledebur 1837-1906）の指導を受けた。1902年10月に帰国、翌月に東京帝大教授に昇任し、鉄冶金学講座を担当する。ドイツからツァイス社製マルテンス大型金属顕微鏡を導入して金属組織学の分野を開拓、官営八幡製鉄所や陸軍造兵廠、東北帝大などでも調査・指導にあたった。なお帰国の年に結婚した妻はドイツ学の先駆者、加藤弘之（1836-1916）の五女である。1915年、野呂や今泉とともに日本鉄鋼協会を創設、1921年に帝国学士院賞、1946年に文化勲章を受けた。

俵は学生時代から、山陰に伝わる砂鉄精錬法（たたら吹き製鉄法）に注目していた。洋鉄の導入によって衰退しつつあるこの技法を再活用する方途を探っていた彼は、1898年の夏休みに広島や鳥取、島根で調査を行い、さらに研究を続けた。ドイツからの帰国後は東京帝大工学部に日本刀研究室を設立、日本刀の制作場を設けて刀匠を招聘した。「和鋼」という名称は、1914年に俵が初めて用いた。安来市にある和鋼博物館は、皇紀二六〇〇年の記念事業として建設計画が始まり、1946年に日立製作所（現在の日立金属）安来工場の付属施設として開館した「和鋼記念館」を前身とするが、俵は同館の設立に協力しており、彼の名を冠した記念室に遺品が展示されている。

日本の鉄鋼業が飛躍期にあった1920年７月、俵は第一次世界大戦後の欧米各国を視察に訪れ、ドイツには最も長く、11月半ばから翌年２月末まで滞在した。帰国後の講演記録は、戦後間もない時期のドイツ鉄鋼業に関する貴重な観察になっている。

俵によれば、20年前に留学した時も宿代をふっかけられたり、釣銭をごまかされる経験をしたが、戦後のドイツではそうした機会がますます増えており、チップをしつこく催促されたり、郵便の不通に悩まされることもしばしばだった。また、あちこちに敗戦の爪痕が残っており、ライン川周辺はイギリス兵やベルギー兵が通交を管理し、コブレンツの要塞にはアメリカ国旗が翻っていた。フランスに奪還されたアルザス=ロレーヌでは、ビスマルクや皇帝の彫像が撤去されるところを目撃している。

しかし、肝心の鉄鋼業の印象は異なっている。戦前の７、８割程度まで生産高が落ち込んでいるにもかかわらず、「どの工場も盛にやつて居」り、12時間労働や16時間労働が行われていたという。確かに、ドイツが失業率の上昇、そしてハイパー・インフレーションの局面に入るのは1922年半ばごろからなので、俵が訪れた時期は戦後の混乱が続いているとはいえ、まだ復興への希望が感じられた時期だったと言える。ストライキ闘争によって１月５日に鉄鋼労働者の賃金が55～70％引き上げられたことも、楽観的な観察を裏づける根拠となろう。

俵はさらに、20年前のドイツの鉄鋼業界では各社、各工場が自分の技術を秘密にしていたのに、今では石炭を融通し合ったり、講習会を開いて新しい技術・知識を共有したり、共同の委員会を設置して様々な問題について協議したりして、一致団結して難局を乗り越えようとしていること、そして国家や学界もここに協力して「独逸全体が一団」となっていることを伝える。彼は、「戦時中全世界を相手として戦つた国民であり、今日も全世界から苛められて居るやうなことに思つて居る独逸人で初めてさう云ふことが出来るのであらう」と感心しつつ、地理的に世界のマーケットから遠く、刺激を受けづらい日本も「それと同じやうな努力をせねばならぬことに尽きる」と結論している。

国家や社会の違いを意識しつつも、なお他者から学べるものを学ぼうとする言葉は貪欲であり謙虚でもあるが、その後の日独の歴史を知る後世の目には、「独逸人の今の心理状態――挙国一致で外国に当たらなければならぬと云ふやうな考」と未曾有の世界大戦との関連、そして「鉄」と「努力」と「団結」とがさらなる戦争や革命の暴力に繋がる危険について、何の省察も示されなかったことが不吉に映る。

（６） 魔弾の射程圏外にあるもの(7)

幕末から明治にかけての石見地方には、ドイツ留学を経験して各分野を牽引した学者や文化人が多い。とくに津和野からは地質学者の小藤文次郎（1856-1935）、森鷗外（1862-1922）、農政学者の高岡熊雄（1871-1961）、劇作家の中村吉蔵（1877-1941）、医学者の中田瑞穂（1893-1975）が

出ており、他にも邇摩郡宅野村（現在の大田市仁摩町）出身で「ロート目薬」の生みの親である井上豊太郎（1861-1951）や、那賀郡小国村（現在の浜田市）出身の島村抱月（1871-1918）らの名が挙がるが、細菌学者として大きな功績を残したのが、秦佐八郎（1873-1938）である。

美濃郡都茂村（現在の益田市）の庄屋の家に生まれた秦は、14歳で姻戚の医家の養子となった。1891年に岡山薬学校（現在の関西高校）を卒業して、第三高等中学校医学部（現在の岡山大学医学部）に入学する。卒業後に1年間の兵役に就いた後、1897年に岡山県立病院助手となり、荒木寅三郎（1866-1942）と井上善次郎（1862-1941）に学んだ。その後は郷里の期待に応えて山村で医業を継ぐ予定だったが、荒木の推薦を受け、北里柴三郎（1853-1931）が設立した大日本私立衛生会伝染病研究所に入所、野口英世（1876-1928）、志賀潔（1871-1957）らと同僚になった。1899年11月に日本にペストが侵入して神戸や和歌山県湯浅で流行すると、秦は現地に赴いて医療活動と調査にあたり、その後も8年にわたりペスト研究を続けた。1904年に日露戦争が始まると満洲で従軍し、翌年からは似島検疫所に転属、捕虜などの防疫を担当した。この時に秦が考案した真空ホルマリン消毒法は陸軍式消毒法として広まり、ドイツでも採用された。

伝染病研究所内で働きが認められた秦は、1907年からドイツに3年間留学する機会を与えられた。ベルリンのロベルト・コッホ細菌研究所のヴァッサーマン（August v. Wassermann 1866-1925）の下で一年、モアビート市立病院で三ヶ月を研究に費やした後、1909年1月からフランクフルトの国立実験治療研究所に移ってエールリヒ（Paul Ehrlich 1854-1915）に師事、化学物質を感染症の治療薬として開発するための研究に従事した。エールリヒは前年にノーベル生理学・医学賞を受賞した細菌学・免疫学の世界的権威であり、志賀も1901～05年に留学した際に指導を受けている。

秦は好機にエールリヒの門を叩いた。1906年、フランクフルトの銀行家シュパイアー（Georg Speyer, Gustav Speyer 1857-1902）の遺志により100万マルクの寄付を受けたことで研究所が発展を遂げたばかりだったことにくわえ、1905年にベルリン大学附属シャリテ病院のシャウディン（Fritz Schaudinn 1871-1906）とホフマン（Erich Hoffmann 1868-1959）が梅毒の病原スピロヘータを発見、さらに1907年にはイタリアでスピロヘータをウサギの睾丸及び陰嚢に接種することに成功するなど、感染症研究が大きく前進した時期だったのである。

エールリヒと秦は膨大な回数の実験を繰り返し、1909年6月初め、砒素製剤606号の梅毒スピロヘータに対する有効性を確認した。彼らの開発した薬は「サルバルサン」の名――「救世主salvare」と「ヒ素 arsenicum」の合成語である――で1910年からヘキスト社から販売された。感染症に対する化学療法の道を拓いたサルバルサンは、エールリヒが追い求めた「魔法の弾丸Zauberkugel」、すなわち副作用を引き起こすことなしに病因となる微生物を殺す特効薬の、第一号であった。

1910年8月にドイツを立ち、アメリカを経由して帰国した秦はその後も研究を続け、第一次世

界大戦で交戦国となったドイツからのサルバルサンの輸入が途絶えると、鈴木梅太郎（1874-1943）による国産化に協力した。1914年11月、伝染病研究所が突如として内務省から文部省に移管されると北里らとともに辞職した後、北里研究所の新設に尽力し、北里の死後は副所長を務めた。1920年からは慶應義塾大学医学部教授を兼務して、1927年にドイツ国立科学アカデミー会員、1933年に帝国学士院会員に選ばれた。

他方で、晩年のエールリヒは栄誉と苦難の両方を経験した。ユダヤ人であった彼は学生時代から差別を受け、研究者として安定した地位を確立するまでにも苦労を重ねていたが、サルバルサンの開発後も反ユダヤ主義者たちから、この薬によって暴利を貪っているとか、性モラルの低下を招いたなどという批判を受けた。第一次世界大戦が勃発すると、エールリヒは知識人たちの共同声明文「93人のマニフェスト」に署名し、ドイツの戦争を正当化しているが、ここには、日常的に差別に晒されているがゆえに進んで愛国心を表明しようという、当時のユダヤ系ドイツ人の多くが共有していた心理が働いていたと思われる。

しかし、エールリヒの研究を支えた周囲の人々の運命はさらに過酷である。ユダヤ人をドイツ社会に巣くう病原菌と見なすナチ期が到来すると、エールリヒの妻子は1939年にスイスに逃れ、そしてアメリカに移住した。ドイツに留まった彼の四人の姉妹の家族は、ホロコーストの犠牲となった。エールリッヒの研究所を財政面で支援したシュパイアー一家もユダヤ系であったため、ナチ期に財産を「アーリア化」された。さらに、秦がベルリン時代に教わったヴァッサーマンの妻と息子、またエールリヒの支援者でフランクフルト大学の創設者の一人でもある実業家ヴァインベルク（Arthur v. Weinberg 1860-1943）もホロコーストで命を奪われている。

1940年２月、ワーナーブラザーズはエールリヒの妻の協力を得て映画『エールリヒ博士の魔法の弾丸』（邦題は『偉人エールリッヒ博士』）を制作した。主役を演じるのは、ルーマニアからの亡命ユダヤ人であるロビンソン（Edward G. Robinson, Emanuel Goldenberg 1893-1973）である。この作品にはエールリヒのスタッフの一人として、ハワイ出身の俳優ハリ（Wilfred Hari, Yoshitaka Wilfred Horiuchi 1909-?）が演じる「秦博士」が登場し、エールリヒの死を見届けている。フィクションをまじえた作品であり、ユダヤに関する描写を避けているが、二人の労苦、親密な協力関係が伝わってくる。

Ⅲ．おわりに

本稿は山陰両県を対象とした。大都市圏から離れたこの地域は日独交流史の表舞台であったとは言い難いが、信夫淳平、水木しげる、亀尾英四郎、俵国一、秦佐八郎ら多くの人材が生まれ、またケンパーマンやカルシュなど、日本の歴史や文化に強い関心を持つドイツ人が来訪を待望した土地でもあった。カルシュを訪ねたゼッケルは、小規模ながら濃密な松江の文化的環境に感銘を覚え、「日本では、文化のレベルが住民の数に比例しているわけではありません」と母に書き

送っている。

本稿で扱った事例以外にも、森鷗外、日本で初めてX線写真の撮影に成功した物理学者の村岡範為馳（1853-1929）、フランクフルト大学社会研究所に滞在した経済学者の福本和夫（1894-1983）、政治学者の矢部貞治（1902-67）、カルシュと前後して松江で教えたプラーゲ（Wilhelm Plage 1888-1969）とシュヴァルベ（Hans Schwalbe 1910-98）など、検討すべきテーマはなおも残されている。それらについては別の機会に論じたい。

注

（1） これまでの論考については、小原淳「大阪府と兵庫県に存するドイツ関連史跡の総合的検討」『早稲田大学高等研究所紀要』14、2022年の註1を参照。

（2） 信夫淳平『東欧の夢』外交時報社出版部、1919年；同『外政監督と外交機関』日本評論社、1926年；同『ビスマルク伝』改造社、1932年；同『鉄血宰相ビスマーク』潮文閣、1942年；新聞人信夫韓一郎刊行会編・出版『新聞人信夫韓一郎』、1977年；酒井哲哉「古典外交論者と戦間期国際秩序―信夫淳平の場合」『国際政治』139、2004年；酒井一臣「外交の民主化と国際協調主義―〈国民外交〉論を中心に」『史林』94-1、2011年；*Stenographische Protokolle über die Sitzungen des Hauses der Abgeordneten des Reichsrathes*, XX. Session (20.10.1909-20.03.1911), S. 2795f.

（3） 亀尾覺編・出版『亀尾英四郎全集』2007年；亀尾覺編『亀尾英四郎先生』文芸社、2015年；水木しげる、水木プロダクション編『ゲゲゲのゲーテ』双葉社、2015年；水木しげる『水木サンの幸福論』角川書店、2015年；同、荒俣宏『戦争と読書―水木しげる出征前手記』角川書店、2015年；田中岩男「亀尾利夫先生のこと」『弘前大学・学園だより』86、2016年；鎌野多美子「武良茂とヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ」『国際研究論叢・大阪国際大学紀要』30-1、2016年；Katja Iken, Caroline Schiemann, Benjamin Braden, Zeitzeugen des Hungerwinters 1946/47. Die Moral geht zum Teufel, in: *Spiegel Online „einestages"*, 20. Februar 2017 (https://www.spiegel.de/geschichte/hungerwinter-1946-47-in-deutschland-das-ueberleben-nach-dem-krieg-a-1133476.html、2022年9月15日最終確認); Quirinus C. Greiwe, Silvesterpredigt vom 31. Dezember 1946 in der Kirche St. Engelbert in Köln-Riehl, in: *Josef-Kardinal-Frings-Gesellschaft zu Neuss am Rhein e.V.* (https://www.frings-gesellschaft.de/leben-und-werke/sylvesterpredigt/、2022年9月15日最終確認).

（4） フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト/加藤九祚他訳『日本』第六巻、雄松堂書店、1979年；工藤雅樹『日本人種論』吉川弘文館、1979年；阪本是丸『国家神道形成過程の研究』岩波書店、1994年；山口輝臣『明治国家と宗教』東京大学出版会、1999年；原武史『〈出雲〉という思想』講談社、2001年；P・ケンパーマン/長沢敬訳『ケンパーマンの明治10年山陰紀行（全訳）―あるドイツ人が見た明治初期の山陰　神在月の出雲・松江を訪ねて』今井出版、2010年；ヨーゼフ・クライナー編『小シーボルトと日本の考古・民族学の黎明』同成社、2011年；P・ケンパーマン/長沢敬訳『ケンパーマンの明治7年神道報告―あるドイツ人の明治初期〈日本学〉事始め』今井出版、2015年；岡本雅享『千家尊福と出雲信仰』筑摩書房、2019年；Peter Kempermann, Reise durch die Central-Provinzen Japans, in: *Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für die Natur- und Völkerkunde Ostasiens*, 2-14, 1876-1880; Bernd Lepach, Kempermann, Peter K., in: *Meji-Portraits* (http://www.meiji-portraits.de/meiji_portraits_k.html、2022年9月15日最終閲覧); *The Sydney Mail and New South Wales Advertiser*, 17. November 1900; Justus Brinkmann, Museum für Kunst und Gewerbe, Bericht für das Jahr 1905, in: *Jahrbuch der hamburgischen Wissenschaftlichen Anstalten*, 23, 1906; Josef Kreiner (Hg.), *Beiträge zur japanischen Ethnogenese: 100 Jahre nach Heinrich von Siebold*, Bonn 1980.

（5） 若松秀俊『湖畔の夕映え―カルシュ博士と松江』文芸社、2002年；同『四ツ手網の記憶―松江を愛したフリッツ・カルシュ』ワン・ライン、2007年；清水雅大『文化の枢軸―戦前日本の文化外交とナチ・ドイツ』九州大

学出版会、2018年；田嶋信雄・田野大輔・大木毅・工藤章・熊野直樹・清水雅大『極東ナチス人物列伝―日本・中国・〈満洲国〉に蠢いた異端のドイツ人たち』作品社、2021年；Fritz Karsch, Die ethischen Grundlagen der nationalen Bewegung in Deutschland, in: Walter Donat, Fritz Karsch, *Beiträge zum Verständnis der nationalen Bewegung in Deutschland*, Tokyo 1934.; Annette Hack, Das Japanisch-Deutsche Kulturinstitut in Tôkyô zur Zeit des Nationalsozialismus: von Wilhelm Gundert zu Walter Donat, in: *Nachrichten der Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (NOAG)*, 1995; Hans-Joachim Bieber, *SS und Samurai: deutsch-japanische Kulturbeziehungen 1933-1945*, München 2014; ders. (Hg.), *Dietrich Seckel: Berichte aus Japan: Briefe an seine Mutter, Hiroshima 1936 bis Tokyo/Urawa 1941*, München 2020.

（6） 俵国一「欧米製鉄業視察談」『鉄と鋼』8-11、1922年；同「独逸視察談」『地学雑誌』35-1、35-2、1923年；同編『古来の砂鉄製錬法―たゝら吹製鉄法』丸善、1933年；同『日本刀の科学的研究』日立評論社、1953年；飯田賢一『鉄の語る日本の歴史』上下、そしえて文庫、1976年；久米邦武『特命全権大使 米欧回覧実記』第三篇、博聞社、1878年；赤松則良『赤松則良半生談―幕末オランダ留学の記録』平凡社、1977年；ウィリアム・マンチェスター/鈴木主税訳『クルップの歴史―1587-1968』上下、フジ出版社、1982年；Lothar Gall, *Krupp: der Aufstieg eines Industrieimperiums*, Berlin 2000.

（7） 志賀潔『エールリッヒ伝』富山房、1940年；秦藤樹「秦佐八郎の生涯と業績」『日本医史学雑誌』33-3、1987年；秦八千代『秦佐八郎小伝』・秦藤樹『秦佐八郎の生涯と業績』大空社、1994年；石田純郎「秦佐八郎再考―岡山大学の前身校出身の化学療法薬開発の創始者」『新見公立短期大学紀要』27、2006年；石田三雄「医薬第一号を生んだ科学者精神―秦佐八郎医師の手堅い実験手法」『近創史』 5 、2008年；Jürgen v. Ungern-Sternberg, Wolfgang v. Ungern-Sternberg, *Der Aufruf "An die Kulturwelt!": das Manifest der 93 und die Anfänge der Kriegspropaganda im Ersten Weltkrieg: mit einer Dokumentation*, Stuttgart 1996; Wolfgang Mommsen (Hg.), *Kultur und Krieg. Die Rolle der Intellektuellen, Künstler und Schriftsteller im Ersten Weltkrieg*, München 1996; Bernhard Witkop, Paul Ehrlich and his magic bullets. revisited, in: *Proceedings of the American Philosophical Society*, 143-4, 1999; Axel C. Hüntelmann, *Paul Ehrlich: Leben, Forschung, Ökonomien, Netzwerke*, Göttingen 2011.

表１：戦前に刊行されたビスマルク関連の主要な著書

ア・ミシエール / 長田銈太郎、平山成一郎『獨逸國首相比斯馬爾克傳』青山清吉、1875年 木戸孝允（1833-77）の序文。長田（1849-89）は外交官、平山（生没年不詳）は詳細不明。
Frederick II, King of Prussia / C・ラドリート訳、加藤正之再訳『日耳曼大宰相比斯馬克政畧起原』山内瑞圓、1877年 ラドリート（生没年不詳）、加藤（生没年不詳）は詳細不明。
Frederick II, King of Prussia / 井上安麿訳『独逸国大宰相比斯馬克氏政畧溯原　全』丸屋善七、1884年 井上（生没年不詳）は詳細不明。
梅田六之助抄録・出版『独逸国大宰相比斯馬克候ト碩学ブルンチユリー氏トノ談話』、1886年 梅田（生没年不詳）は詳細不明。
渡辺治編纂『鉄血政略』金港堂出版、1887年 渡辺（1856-93）は衆議院議員。『大阪毎日新聞』主筆。
George Bullen / 山口荘吉訳補『蓋世之偉業―独乙宰相比斯馬克公実伝』春陽堂、1887年 濱田健二郎（1860-1918）校閲。ビューレン（1816,17 or 18-94）は大英図書館司書。山口（生没年不詳）は詳細不明。
Charles Lowe / 村上濁浪訳『ビスマーク公清話』裳華房、1898年（1899年訂正再版） ローエ（1848-1931）は『タイムズ』のベルリン特派員。村上（1872-1924）は出版者。白瀬矗（1861-1946）の南極探検隊の後援者。
吉川潤二郎『鐵血宰相傳』開拓社、1897年 吉川（生没年不詳）の詳細不明、伝記などの翻訳複数。後に『ビスマルク言行録』内外出版協会、1908年に改版。
笹川潔、小阪象堂『ビスマルック』博文館、1899年 笹川（1872-?）は読売新聞主筆（1910-13）、小阪（1870-99）は東京美術学校の教員。
村上俊蔵（濁浪）編『鉄血宰相語録』国光社出版部、1902年
蜷川新訳『比斯麦が夫人に与うるの書』国民書院、1905年 蜷川（1873-1959）は外交官、法学者。
長田秋濤『愛の比斯馬克』春陽堂、1909年 長田（1871-1915）は劇作家・仏文学者。
久保天随『鐵血宰相ビスマーク』鍾美堂書店、1914年 久保（1875-1934）は中国文学者。
東京史學會『ビスマーク』明治出版協会、1914年
西澤富則『鐵血宰相ビスマーク逸傳』實業之日本社、1914年 西澤（生没年不詳）はドイツ文学者、七高校長。
齋藤文藏『ビスマルクとドイツ帝國の建設』冨山房、1914年 ドイツ帝国創設までが対象。齋藤（1886-1930）は歴史学者。山形高校、東京女高師で教える。
肝付兼行、常田宗七『ビスマーク』博文館、1915年 肝付（1853-1922）は海軍軍人、大阪市長。常田（生没年不詳）は第九中学校初代校長、東京女専初代校長など。
蜷川新『オツト・フオン・ビスマルク』實業之日本社、1917年
Fürst Bismarcks Ausgewählte Reden, zusammengestellt von K. Miura, Nanzando, 1917. 三浦吉兵衛（1877-1939）はドイツ文学者、山口高校や七高、五高、一高で教える。
森孝三、後藤新平『ビスマルク演説集』ビスマルク演説集刊行会、1919年 森孝三（1874-?）は後藤新平（1857-1929）の秘書、市政調査会参事、昭和金鉱取締。
定金右源二訳『政局は斯くして動く』大日本文明協会事務所、1924年 定金（1887-1973）は早稲田大学教授。
Arthur von Brauer / 後藤新平、森孝三『ビスマルク公外交機略』、1924年 ブラウアー（1845-1926）はバーデン出身の外交官、ビスマルクの側近。

信夫淳平『ビスマルク伝』（「偉人伝全集」第 5 巻）改造社、1932年
鶴見祐輔『ビスマーク―英雄天才史傳』大日本雄辯會講談社、1935年 鶴見（1885-1973）は官僚、政治家。後藤新平の女婿。
中川重『ビスマルク』日本社、1935年 著者は日本社の偉人伝記文庫（偉人伝記叢書）の著者、詳細不明。
鹿島守之助『ビスマルクの外交政策』巌松堂書店、1939年 外交中心の内容。鹿島（1896-1975）は外交官、実業家、政治家、外交史家。
吹田順助編訳『ビスマルクの手紙』主婦の友社、1940年 吹田（1883-1963）は独文学者、東京商大などで教える。
信夫淳平『鐵血宰相ビスマーク』潮文閣、1942年
Emil Ludwig / 中岡宏夫『ビスマルク―闘ふ人』翼書房、1942年 ルートヴィヒ（1881-1948）はジャーナリスト・伝記作家。中岡（1910-?）は詳細不明、訳書多数。
時野谷常三郎『ビスマルクの外交』大八洲出版、1945年 1945年10月 1 日発行。時野谷（1881-1942）は歴史学者、京都帝大などで教える。

表 2 ：山陰地方に存する日独関係の史跡一覧

史　跡　名	住　　所	備　　考
鳥取城	鳥取県鳥取市東町	Ⅱ(1)に関連。敷地内に県立鳥取西高。
信夫恕軒の漢詩碑	栃木県那須塩原市塩原 1333 付近	Ⅱ(1)に関連。
水木ロード	鳥取県境港市大正町	Ⅱ(2)に関連。近隣に水木しげる文庫（松ケ枝町 39）、水木しげる記念館（本町 5）、水木しげる先生コーナー（竹内団地 209）。
水木しげる先生 生誕の地	大阪府大阪市住吉区東粉浜 3-23	Ⅱ(2)に関連。
水木しげる邸跡	兵庫県西宮市今津水波町 2-26	Ⅱ(2)に関連。
鬼太郎公園	東京都調布市富士見町 2-19-4	Ⅱ(2)に関連。近隣の覚證寺（富士見町 1-35-5）に水木の墓所。他に天神通り商店街（布田 1）、鬼太郎ひろば（下石原 1-58-5。
ララ物資の記念碑	神奈川県横浜市中区新港 1-2-1	Ⅱ(2)に関連。
カトリック関口教会	東京都文京区関口 3-16-15	Ⅱ(2)に関連。ケルン大司教区の支援で建立。
出雲大社	島根県出雲市大社町杵築東 195	Ⅱ(3)に関連。
大森貝墟の碑	東京都大田区山王 1-3-3	Ⅱ(3)に関連。近隣に日本考古学発祥の地記念碑（大森北 1-6　JR 大森駅構内）、大森貝塚遺跡庭園（品川区大井 6-21-6）。
ハインリヒ・シーボルトの供養塔	大阪府池田市綾羽 2-5-16　大広寺	Ⅱ(3)に関連。
島根大学旧奥谷宿舎	島根県松江市奥谷町 140	Ⅱ(4)に関連。
島根大学総合博物館 アシカル	島根県松江市西川津町 1060 島根大学生物資源科学部 3 号館	Ⅱ(4)に関連。
小泉八雲記念館・旧居	島根県松江市奥谷町 322	Ⅱ(4)に関連。
和鋼博物館	島根県安来市安来町 1058	Ⅱ(5)に関連。

史　跡　名	住　　所	備　　考
俵国一の像	島根県浜田市殿町 1　浜田市役所	Ⅱ(5)に関連。
菅谷たたら山内高殿	島根県雲南市吉田町吉田 1214	Ⅱ(5)に関連。重文。生活伝承館を併設。近隣に鉄の歴史博物館（吉田 2533）。
奥出雲たたらと刀剣館	島根県仁多郡奥出雲町横田 1380-1	Ⅱ(5)に関連。
たたら角炉伝承館	島根県仁多郡奥出雲町上阿井 1325-6	Ⅱ(5)に関連。近隣に可部屋集成館（上阿井 1655）。
絲原記念館	島根県仁多郡奥出雲町大谷 856	Ⅱ(5)に関連。
金屋子神話民俗館	島根県安来市広瀬町西比田 213-2	Ⅱ(5)に関連。
大板山たたら製鉄遺跡	山口県萩市紫福大板 257-1	Ⅱ(5)に関連。世界遺産。
開陽丸記念館	北海道檜山郡江差町姥神町 1-10	Ⅱ(5)に関連。
五稜郭	北海道函館市五稜郭町 44	Ⅱ(5)に関連。
旧赤松家記念館	静岡県磐田市見付 3884-10	Ⅱ(5)に関連。
今泉嘉一郎生家	群馬県みどり市東町花輪 944	Ⅱ(5)に関連。近隣の旧花輪小学校（花輪 191）の校舎は今泉の寄付で建設。
秦記念館	島根県益田市美都町都茂 807	Ⅱ(6)に関連。
中田瑞穂生誕の地	島根県鹿足郡津和野町後田 76-1	Ⅱ(6)に関連。
京都大学医学部資料館	京都市左京区吉田近衛町	Ⅱ(6)に関連。荒木寅三郎の胸像。百周年時計台記念館の前に「京都大学前總長荒木博士像」。
志賀潔先生顕彰碑	宮城県仙台市青葉区本町 3-9-3	Ⅱ(6)に関連。
村岡範為馳の記念碑	鳥取県鳥取市河原町釜口	物理学者。1881 年に日本人初の海外での博士号取得。日本で最初に X 線撮影に成功。
鳥取県立中央病院の「鬼手天心」像	鳥取県鳥取市江津 730	初代院長の伊藤隼三（1864-1929）は 1896～99 年にドイツなどに留学。
北栄みらい伝承館	鳥取県東伯郡北栄町田井 47-1	福本和夫関連の資料を所蔵。
中村元記念館	島根県松江市八束町波入 2060	哲学者の中村元（1912-99）は一高在学中にペツォルト（Bruno Petzold 1873-1949）から仏教について学ぶ。
森鷗外記念館	島根県鹿足郡津和野町町田	
西周生誕地碑	島根県鹿足郡津和野町森村	西周（1829-97）は獨逸学協会学校の創立に尽力。
西周旧居	島根県鹿足郡津和野町後田 4	
津和野今昔館	島根県鹿足郡津和野町町田イ 270-4	
藩校養老館	島根県鹿足郡津和野町後田ロ 66	
津和野町郷土館	島根県鹿足郡津和野町森村 650	

本稿は、2018～22年度科学研究費補助金・基盤研究(C)「1848～1871年のドイツ系革命家たちの活動とネットワークに関する研究」（課題番号18K01050）の成果の一部である。